

こもれび



2022 (令和4)年 10月 No.157

ムラサキシヤチホコ

光が上から当たるように、必ず葉の上面にとまり、丸まった枯れ葉のように見える。

擬態、生き抜くいのち

「一寸の虫にも五分の魂」とは、どんなに弱小なものにもそれ相当の意地や考えがあり、侮^{あや}つてはならないことを指すことわざです。ある日、まだ子供のカマキリが両前脚を上げて、私を威嚇^{いかく}してきた時、その小さく細い体に五分の魂を感じました。

昆虫が自分の身を守るためにとる行動が威嚇^{いかく}以外にもたくさんあることは、「ダメして生きのびる虫の擬態」(海野和男著)に詳しく、面白い。威嚇^{いかく}はしばしば、こげおどしになり、捕食者に食べられてしまいますが、もっと効率のよい方法は擬態で、弱者が自然界で生き残る術は、まさに芸術です。

この本を紐解いていくと、主に鳥たち捕食者の目をくらすために擬態をした優れた昆虫たちが紹介されています。木の葉、枯れ葉や枯れ草、またバラの棘まで真似るもの、木の幹や地面に溶け込むもの、芽吹きに合わせて姿を合わせるもの、きちつと枝のようにポーズをとるもの、強いハチや毒をもっている虫に真似るもの、へびに化けるもの、硬くて食べられない虫に似るもの、そして、死んだふりをするものなど。

海野氏は擬態の神秘を次のように書いています。

「ダーウインの自然淘汰という進化論での考え方では、生き残った個体のもつ有利な形質が子孫に遺伝し、さらに有利な形質が残されていくという。その進化理論のお手本のような擬態現象であるが、生存に有利な形質が遺伝していくのは納得したとしても、どうしてそんなに似た者が生まれてくるのかという答えにはなっていない。昆虫たちはどのようにして、擬態を進化させてきたのだろうか。(中略)昆虫たちが意志を持って擬態を発展させてきたと考えたくなる。しかし、昆虫は自分の姿を見ることができないだろう。」

以前、「一寸の虫にも五分の魂」を小さな虫にも私たちと同じいのちがあると解釈していました。昆虫の擬態が精巧であればあるほど、いのちを生き抜く気高さを感じ、ひいては自分のいのちも他人様のいのちも、動物も昆虫も全てのいのちが大切に思えてきます。高貴な擬態が冒^{あか}しがたいのは、そこに見事なだけではない、生き抜く強さがあるからです。

株式会社溝口祭典 溝口勝巳

*8頁に擬態の一部を掲載しました。昆虫が苦手でない方はどうぞご覧ください。



やましたりきと/山下 力人 株式会社やましたグリーン 代表取締役
 1977年東京都八王子市鹿島にて生まれる。庭師として12年の修行の後、やましたグリーンを設立。心理カウンセラーの資格を持つ庭師歴27年の「心の庭師」。2012年に伐採予定の植木を生かしてあげたいと自社の敷地に植栽したことをきっかけに「植木の里親」活動を開始。SDGs事業に取り組む先進企業として様々な賞を受賞。現在は、環境創造会社として「植木の里親活動」「もらえる植物園」「サスティナブルガーデン」の環境循環型の3つの事業を柱に、より良い環境社会の実現に取り組んでいる。
 【受賞歴】 2019年 第17回多摩ブルーグリーン賞「多摩みらい賞」を受賞
 2021年 第9回グッドライフアワード審査委員特別賞「森里川海賞」受賞
 2022年 GOODDESIGN賞 BEST100に選定される

植木の里親 やましたグリーン



半纏に猫

はんてんにねこ



第1回 檜原村の赤い屋根

こもれば読者のみなさま、はじめまして。やましたグリーンの下郷と申します。八王子市下恩方町で造園業を営んでおります。溝口様からお話をいただき、本紙に私の文章を掲載していただくこととなりました。ただけましたら幸いです。

私は造園会社を営んでいます。ありがたいことに色々なところで多くの人と名刺交換や挨拶をさせていただくことがあります。その時に良く聞かれるのが「何代目ですか？」という質問です。これは家業を継いだ、何代目かの社長だと想定されたの質問ですが、やはり造園業というと何代も続く老舗の会社をイメージされるのです。

その質問をされるたびに「私が初代です」と答えるのですが、その時に少し気恥ずかしい気持ちになります。自分でも不思議だったので、なぜそんな気持ちになるのか考えてみました。

それは、飛鳥時代から千四百年以上も続いている造園業に関わるものとして、伝統的な技術や知識、昔か

ら受け継がれてきた匠の技に対する憧れや、畏敬の念が無意識にあるからだと思います。

「私が初代です」は「私はまだまだ見習い庭師です」と言っているような気持ちになるのです。(笑)

少し長くなりますが、自己紹介がてら造園業が家業ではなかった私が、なぜ庭師になり、会社をつくったのかをお話したいと思います。

私の母は東京都西多摩郡檜原村の出身です。ご存じの方も多いと思いますが、檜原村は東京都多摩地域の中で唯一の「村」であり、都心から約五〇キロはなれた東京の西に位置する緑豊かな大自然の中にあります。面積の九割が森に囲まれ、村の大半が秩父多摩甲斐国立公園に含まれています。

私が子供のころ、この祖父の家遊びに行くのが大好きで、よく連れて行ってもらいました。この祖父母宅は檜原村の中でもかなり奥の方にありました。車で家まで行くことができず、道路の終点に車を停めて、そこから登山をしてやっとたどり着く場所がありました。

上あつたと思いますが、それを番線(太い針金)でつないでいきます。それぞれの場所ので長い丸太を支えながらの作業になるので、私も一人で丸太をつながなくてはなりません。出来上がった足場を縦横に移動しながらトタンを張り付けていきます。

作業の指示をする祖父や叔父たちは、教えるのがとても上手で、道具の使い方や、足場を移動するときには体のどの部分に力を入れるかなどをわかりやすく教えてくれました。そのおかげで小学生の私も「仕事」ができるようになり、実際に役に立っているという実感は大きな自己肯定感につながりました。

子供の足では少々きついつづら折りの山道を(三十分ほどだったと思いますが)登って行くと、針葉樹の向こうに赤い屋根の母屋が見えてきます。その屋根が見えた時は、毎回なんとも言えない嬉しさがこみ上げてきました。



お引き渡しの様子

夢を追い続けて

精神障がい者と共に！

第2回 風間 美代子

涼しい風が頬を撫でていき紅葉の便りもちらほらと聞こえてくる頃となりました。時はまさに実りの季節、一抹の寂しさを感じるときはありますが、豊富な旬の果物を頂ける幸せに心が踊ります。

皆様にはお変わりなくお過ごしでしたでしょうか。前回からの続きで、今回は夢への第一歩、二〇〇〇年に立ち上げたグループホームをテーマにしたいと思いません。その前に全てのテーマに関わる大変だった資金繰りについて少し触れたいと思います。

まず始めは委託を受けて五ヶ所の公園清掃や家庭菜園の整備をしました。朝六時にそれぞれマイカーや電車で、箸、ちりとり、ゴミ袋等、そして各自がメンバーさんの分も含めたお弁当を持参で集合して現地に向かいました。広い公園を掃いたり草むしりを

しながらメンバーさんとの会話の中でハツとさせられたり、心にズシンと響いたり、それらはとても充実したひと時でした。その後のお昼休みは、きれいな公園を眺めながら、普段なかなか出来ないとりとめのない会話にお互いの心の緊張が解けていく様で、かけがえのない時間でした。秋の銀杏拾いをした時、あまりに強烈な匂いに逃げ回っていた、今はもう会えなくなってしまうたメンバーさんのことを懐かしく思い出します。

その他、みんなで力を合わせて皮からこねて作った手作り水餃子。いろいろな形の餃子が出来てしまい、普段あまり笑うことの少ないお父さんやメンバーさん達が笑い転げる姿は、今思い出しても心が温かくなる出来事でした。一千個ぐらいは作ったでしょう

か。お祭りではともかくよく売れました。大鍋で茹でても茹でも追いつかず、いつもいつも長い行列が出来ていました。昼間行き場所の少ないメンバーさん達の行き場所作りと、少しでしたがお小遣いを得られる場所、そしてそこは確実に生きる場所でもあった様です。その他、バザーもやりましたが品集めが大変だったのを覚えています。新聞やチラシでの呼びかけに応じてくださった見知らずの方々に、草むらを知って頂く大きなチャンスでもありました。

そんな日々々に明け暮れていた夏のある日。それは私達が地獄の草刈りと呼んで恐れていた仕事でしたが、大変な中、唯一の楽しみは体育館で食べるお弁当タイムでした。後にも先にも体育館がこんなに涼しい場所だと思つた事は、未だかつて有りません。

例によって皆さんでいろいろな話で盛り上がりつつあったのですがわたしの隣に居たメンバーさんがボソッと「こんな日が来るとは思っていなかった。もう何をしても駄目だと思っていたし、誰の役にもたたないと思っていたから」

「普段あまり話す彼では無かったので、聞いた途端何も言えず、なんの根拠もないのに思わず「大丈夫！何とかなるんじゃないかな。仲間もいるし」と慰めにもならない様な言葉を言うのがやっとならぬ。でも心の中ではムラムラと「なんでこんな病気があるんだ！」「なんの罪もない彼らがなんで苦しまないといけないんだらう」「絶対なんとかしないと」「ぜったい諦める訳にはいかない！」と、怒りと共にエネルギーが湧いてきて、体育館の中を歩き回っていました。

そうして貯めたお金を元に、まず皆さんが遠慮なく集える場と、駅近のIKのマンションを拠点として借りる事にしました。ここで皆さんでひしめき合いながら、お茶を飲んだり、闊鍋を突き

ながら、いろいろな想いを聞かせて頂いた事は、二十年を経ても何よりの財産になりました。そして今でも迷った時はヒントをあててくれます。

その後、母子家庭だったメンバーさんのお母様が亡くなったことで住む家を探さなければいけなくなり、「親なき後のグループホーム」を合い言葉に、まずは明るくて便利な所を目標に、民間のマンション四部屋を借りて、実績作りから始めました。勿論スタッフを雇用することは出来なかつたので、家族会やボランティアの方々に助けていただきながらのスタートでした。今振り返ってみますと、将来的に認定して頂ける確固たる保証も無く、本当に無謀だったなと冷や汗の出る思いです。

一年後に正式に認定を受けられ、現在では七十二名の方々が入居して自立の訓練をしています。本当に沢山の方々に助けていただきながら、ここまで来る事ができました。「焦らない」「諦



最初の事業所

めない」「頼りすぎない」を motto に、どんな時も前を向いて歩みを止めず、メンバーさん達と共に歩いてゆけたらと思います。止まらなければなんとかなる！次回はどうなる事業展開になるのかどうぞお楽しみに！

夕焼けの綺麗な季節になってまいりましたが、身体は「夏支度から冬支度へ」変化する時期でもあります。朝夕は、肌寒くなってまいりました。体調には充分お気を付けてご自愛下さい。

かざま みよこ / 風間 美代子 認定 NPO 法人多摩草むらの会代表理事、社会福祉法人草むら理事長



- 【略 歴】 1946年 旧満州新京にて生まれる
- 1997年 息子の発病により発起人となり仲間とともに草むらの会を立ち上げる
- 2008年 認定 NPO 法人多摩草むらの会代表理事就任
- 2018年 社会福祉法人草むら理事長就任
- 【資 格】 認定臨床心理カウンセラー
- 【受賞歴】 2012年 3月 「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞 審査委員会特別賞
- 2013年 12月 ヤマト福祉財団「小倉昌男賞」
- 2016年 12月 多摩ブルー・グリーン賞「経営部門優秀賞」 2度目の受賞



家庭菜園の整備風景

水餃子手作り風景

12～1月・イベントとセミナーのご案内

寄せ植え講座

12月になると街中もクリスマス一色。
ご自宅でもクリスマス気分が味わえる寄せ植えを一緒に作りませんか？
植物を愛するのは好きだけれど、不器用で作るのは苦手、という方も大丈夫。
初心者の方でもきれいに仕上げるコツをしっかりお教えします。
また、日々の管理方法や楽しみ方もお伝えいたします。
当日作った寄せ植えはお持ち帰りできます。



日 時	12月3日(土) 午前10～11時
場 所	こすもす斎場2階(八王子市元横山町2-14-19)
定 員	10名
参加費	会員1000円、一般2000円※当日入会で会員価格になります
講 師	大谷知久(管理部・グリーンアドバイザー)
お申込み	株式会社 溝口祭典 042-642-0921

供養のかたち

樹木葬・納骨堂や永代供養墓、散骨など、ご遺骨についての選択肢が増えている昨今、
お墓を誰に託したらいいか、またお墓を造ることが残された子供や孫にとって負担に
なるのでは、などと迷っている方も多いようです。
以前に比べ、海洋散骨や樹木葬、ロッカー式納骨堂などをお選びになる方も増えてい
ます。お墓についてのご質問・ご相談をお受けいたします。

日 時	令和5年1月29日(日) 午前10～11時
場 所	こすもす斎場2階(八王子市元横山町2-14-19)
定 員	10名 参加費：無 料
講 師	上原武史(式典部主任・一級葬祭ディレクター)
お申込み	株式会社 溝口祭典 042-642-0921

10～11月・イベントとセミナーのご案内

納棺セミナー / 納棺のすべて～亡き人を送り出すために ～現役納棺師による納棺の実演をお見せいたします～

亡き人をお棺に納める際に、なぜ「旅支度」をするのか？
なぜ、亡き人の体を拭くときに逆さ水を用意するのか？
きれいなお別れができるようにするために、納棺師は何をしているのか？等々
納棺についてのたくさんの疑問にお答えします。
ご希望の方は、実際にお棺に入る入棺体験も可能です。
遺族にならないと経験することができないご納棺の儀式を是非体験してみませんか。

日 時	10月29日(土) 午前10～11時
場 所	こすもす斎場2階(八王子市元横山町2-14-19)
定 員	7名 参加費：無 料 まちゼミにも掲載中！
講 師	上原武史(式典部主任・一級葬祭ディレクター)
お申込み	株式会社 溝口祭典 042-642-0921

最近の葬儀事情について

「コロナ禍でのお葬式はどうしたらいいのか？」という相談をここ数年よくいただく
ようになりました。
今でも、「志村けんさん」や「岡江久美子さん」のような火葬なの？という質問も・・・。
私たちの日常生活はコロナで大きく変わりましたが、葬儀もその例外ではありません。
コロナ禍で様変わりした最近の葬儀事情についてお話いたします。

日 時	11月27日(日) 午前10～11時
場 所	こすもす斎場2階(八王子市元横山町2-14-19)
定 員	10名 参加費：無 料
講 師	上原武史(式典部主任・一級葬祭ディレクター)
お申込み	株式会社 溝口祭典 042-642-0921



昆虫の擬態 — 生き抜く芸術 —

- a 芽吹きのような エダシャクの幼虫
- b その名の通り コノハムシ
- c うまく周りに溶け込む クロコノマチョウ
- d 木の枝になる ナナフシ
- e ヨモギに擬態する ハイロセダカモクメの幼虫
- f 地面に溶け込む コノハカマキリ
- g 死んだふりをする シロコブソウムシ
- h ヘビに化ける ツマベニチョウの幼虫



掲載を喜ぶかのように家の庭に出現！お仲間ですが、お見事です。

上記のほかに、よくある物にまぎれるバッタ、虫喰いまで真似るもの、とまると葉そのものになるもの、木の幹の模様や質感までハイレベルに擬態するもの、鳥の糞のふりをするもの、強く怖いハチに擬態するもの、毒をもつものだけでなく、飛び方まで真似るもの、アリに化けるカマキリ、急に目玉模様を飛び出し、敵を驚かすものなど、数々の芸達者たちには舌を巻きます。

なんだか不思議な姿をした昆虫がいるなど思ったら擬態を疑い、それが何の真似をして、どんな得があるのか。また誰がだまされているのかを考えてみるのは面白い。この三者（人、鳥、虫）の関係に気づけることが、生物進化が起こした「自然のたましあい」という面白さを体験する醍醐味だ。

（「だまして生きのびる 虫の擬態」より
・海野和男著）